

## 国立大学法人東京農工大学発足 にあたっての学長あいさつ



平成16年4月1日（木）、国立大学法人東京農工大学が発足し、本学は、国立大学法人東京農工大学が設置する東京農工大学となりました。

当日は、理事・部局長等の任命・指名等が行われ、役員会及び第1回教育研究評議会を開催した後、本部第2会議室において、国立大学法人東京農工大学発足にあたっての学長あいさつがありました。

（国立大学法人東京農工大学発足にあたっての学長あいさつは、3～4ページに掲載）

## 目 次

### 学 内 の 動 き . . . . . 3

国立大学法人東京農工大学発足にあたっての学長あいさつ

国立大学法人東京農工大学 役員及び経営協議会委員（学外委員）紹介

平成16年度 東京農工大学入学式を挙行 ー学長告辞ー

平成16年度 東京農工大学大学院連合農学研究科入学式を挙行 ー学長告辞ー

連合農学研究科構成法人間協定書署名式を挙行

平成16年度 留学センター第20期日本語研修コース開講式を挙行

川出 洋助手が「農芸化学奨励賞」を受賞

ハバロフクス大学副学長が本学を表敬訪問

---

### 人 事 異 動 . . . . . 19

---

### 行 事 4 月 . . . . . 26

---

#### シリーズ

#### F M多摩丘陵（波丘地）の植物 その13 . . . . . 裏表紙

タツナミソウとオカタツナミソウ

#### 農工大の樹 . . . . . 裏表紙

その49 キリ

## 学内の動き

### 国立大学法人東京農工大学発足

#### にあたっての学長あいさつ

去る3月17日に国立大学法人設置委員会が開催され、87の国立大学法人が設立されることが確認され、本日、文部科学省の附属機関であった本学は、国立大学法人東京農工大学が設置する東京農工大学として船出をしました。



文部科学省の附属機関であった国立大学とは変わり、これからは、大学の自主・自立性のもとに、創意工夫をして東京農工大学をより魅力的にする必要があります。とは言え、大学としての基本機能である教育研究、社会貢献の役割は何ら変わることはありません。

そもそも、国立大学の法人化は、大学改革を推進するための一環として行われたものであります。法人化は、運営の効率化の向上といったいわば行政改革の視点を超えて、教育研究の高度化、個性豊かな大学づくり、大学運営の活性化など、従来からの大学改革の流れを促進し、活気に富み、国際競争力のある大学づくりの一環として行われたものであります。

そのためには、従来からの教育研究組織、予算、人事など様々な面での規制が大幅に緩和され、大学の裁量が拡大するといった法人化のメリットを職員全員が大学改革のために最大限に活用するという積極的な発想に立って、今後の国立大学法人東京農工大学の舵を取っていく必要があります。

そして、国立大学法人東京農工大学が果たすべき使命や機能を、中期目標・計画に沿って、実現させ得るかという観点が、今後、本学を運営していく上で重要なことであると考えられます。

本学の使命や機能の重要性は、法人化それ自体によって変わるものではありません。むしろ、21世紀の我が国の「知」の基盤を支えるため、本学に期待される使命や機能の明確化とその確実な実現が従来以上に強く求められてきます。

同時に、国民や社会の意見を本学の運営に適切に反映し、大学運営や教育研究の実績に関する透明性の確保と社会への積極的な情報提供を行い、国民に広く支持される法人として運営していく必要があると考えております。

これらのことを踏まえ、四点ほど申し上げます。

一点目は、法人化は、大学ごとの自主・自律的な運営が求められているということであり、

予算、組織等の規制が緩和される反面、大学は自らの責任で決定し、執行することになります。これからは、本学が有している人材や資産、更には交付金や外部資金をも戦略的に活用して個性化を図る必要があります。このことは当然、これまでの組織の再編成や見直しが必要となります。昨年末から、効率化係数をめぐる動きがあったように、これからのゼロサム社会では、他の大学にない卓越した新規企画を創出しなければ、本学への交付金は確実に減少していくことが想像されます。役員及び職員一丸となって、智恵を出し合い、従来の発想を超えた対応と意識改革でこの問題を克服していきたいと思います。

二点目は「民間的発想」のマネージメント手法の導入、と「学外者の参画」による運営システムの制度化についてであります。

本日から、本学には、監事や理事に学外役員の方に入っていただき、「経営協議会」及び「学長選考会議」にも学外者が参画することになります。本学の専門領域の有識者やOB等、多彩な学外者の方々であり、全学的観点から提言をいただきたいと考えています。

また、新しい運営体制の下で、柔軟で機動的な運営をして行くことが重要ですが、部局においても「教授会」に加え、「部局運営委員会」制を導入し、部局長を中心に機動的な運営を図りたいと考えています。

三点目は、弾力的な人事システムの導入についてであります。

本日から、国家公務員法を離れ、法人自らの責任で大学を運営していくこととなりました。

これからは、新たに規定された学内の諸ルールに沿って、能力・業績に応じた給与システムの導入及び兼業の適正化、弾力化などの面で、多様な人事システムを十分に活用し、大学の運営の活性化を図って行っていきたいと思います。

四点目は、「第三者評価」の導入による事後チェックについてであります。

今後、大学は、6年を期間とする中期目標・計画に従い、国立大学評価委員会から経営及び教育研究実績の総合的評価を受け、評価の結果は大学への資源配分に反映されます。

また、評価結果は公表されるとともに、大学自らも、中期目標・計画をはじめ、財務内容及び教育研究等の情報を積極的に提供しなければなりません。

これから毎年、年度計画を提出し、その達成度について自己点検・評価を行い、業務実績の評価を受けながら、6年間の取り組みで成果を出すことが課題となります。

本学では、点検・評価・改善のシステムとして役員会の下に「全学計画評価委員会」を設置しました。本委員会は、理事である副学長が内部委員会の長となり総括する仕組みとなっており、これを十分に機能させ、対応していきたいと考えています。

最後に、大学を取り巻く環境は著しく変化し、年々厳しくなっています。これは、我が国ばかりでなく、例えば、米国における州立大学の予算なども健康保険など、他の予算の確保の影

響を受けて、引き締めを余儀なくされていると聞いております。

このような状況にあつて、法人化を契機に、本学の基本理念である「使命志向型教育研究—美しい地球持続のための—(MORE SENSE)」の実現に向け、科学技術系大学院基軸大学として高度化を図り、個性豊かなオンリーワン大学を創り上げていきたいと思っています。

そのための行動指針として、①変化を恐れずに革新し、創造に挑戦すること、②環境変化に鋭敏であり、俊敏に行動すること、③常に学生の立場で考え、連帯感と思いやりを持ち、謙虚な心を絶やさないこと、④教育・研究・企画立案に対してプロフェッショナルとしての自覚と誇り、情熱を持つこと、⑤いかなることにも倫理感を持って行動することなどが必要だと思っています。

今後は、この法人化を好機と捉え、社会が大学に対して何を求めているかを常に考え、情報を収集し、次にそれを解析し、新生農工大学の発展につながる教育研究活動の活性化に邁進するとともに、競争的環境の中で、東京農工大学の存在を更に高めて行こうではありませんか。

平成16年4月1日

東京農工大学長 宮田清藏

## ◎ 国立大学法人東京農工大学役員及び 経営協議会委員（学外委員）紹介

平成16年4月1日付けで本学に役員及び経営協議会委員（学外委員）が就任しましたので下記のとおりご紹介いたします。

### 学 長

宮 田 清 藏（みやた せいぞう） 工学博士



昭和16年生  
昭和39年 東京教育大学理学部卒業  
昭和44年 東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了  
昭和44年 東京農工大学講師工学部  
昭和45年 東京農工大学助教授工学部  
昭和61年 東京農工大学教授工学部  
平成7年 東京農工大学大学院生物システム応用科学研究科長  
平成13年 東京農工大学長  
平成16年 国立大学法人東京農工大学長

昭和57年 カリフォルニア工科大学客員教授  
昭和59年 ベル研究所客員研究員  
昭和59年 高分子学会賞  
平成14年 高分子科学功績賞受賞  
平成15年 教育功労賞オフィシエ受勲

### 理 事

神 田 尚 俊（かんだ なおとし） 医学博士 （教育担当副学長）



昭和22年生  
昭和45年 東京農工大学農学部卒業  
昭和46年 東京女子医科大学助手、講師  
平成7年 東京農工大学教授農学部  
平成15年 東京農工大学副学長  
平成16年 国立大学法人東京農工大学理事兼教育担当副学長  
平成16年 大学教育センター長



理 事

北 嶋 克 寛 (きたじま かつひろ) 工学博士 (学術・研究担当副学長)



昭和24年生  
昭和46年 東京大学工学部卒業  
昭和51年 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了  
昭和51年 東京大学助手工学部  
昭和59年 東京農工大学助教授工学部  
平成 6 年 東京農工大学教授工学部  
平成16年 東京農工大学副学長  
平成16年 国立大学法人東京農工大学理事兼学術・研究担当副学長  
平成16年 産官学連携・知的財産センター長

瀬 田 重 敏 (せた しげとし) (広報・国際担当副学長)



昭和12年生  
昭和35年 東京大学工学部卒業  
昭和35年 旭化成工業株式会社入社  
平成元年 旭化成工業株式会社取締役 (樹脂事業部門長補佐、アクリル樹脂事業部長)  
平成 3 年 旭化成工業株式会社取締役 (赤穂海水株式会社代表取締役)  
平成 7 年 旭化成工業株式会社常務取締役 (化成品事業部門長)  
平成 9 年 旭化成工業株式会社専務取締役 (研究開発本部長)  
平成13年 旭化成株式会社 (社名変更) 専務取締役 (研究開発本部長)  
平成13年 旭化成株式会社特別顧問  
平成16年 旭化成株式会社特別顧問辞任  
平成16年 国立大学法人東京農工大学理事兼広報・国際担当副学長

山 本 順 二 (やまもと じゅんじ) (総務担当副学長)



昭和22年生  
昭和45年 早稲田大学教育学部卒業  
平成 4 年 文部省大臣官房総務課広報室長  
平成 6 年 文部省初等中等教育局視学官 (内閣審議官)  
平成 8 年 文部省大臣官房調査統計企画課長  
平成 9 年 奈良先端科学技術大学院大学事務局長  
平成11年 長崎大学事務局長  
平成13年 東京農工大学事務局長  
平成16年 国立大学法人東京農工大学理事兼総務担当副学長

## 監 事

## 小 林 俊 一 (こばやし しゅんいち) 理学博士 (常勤)



昭和13年生  
 昭和37年 大阪大学理学部卒業  
 昭和42年 大阪大学大学院理学研究科博士課程修了  
 昭和42年 大阪大学基礎工学部助手  
 昭和43年 東京大学理学部助手  
 昭和47年 東京大学理学部講師  
 昭和50年 東京大学理学部助教授  
 昭和60年 東京大学理学部教授  
 平成 5 年 東京大学理学系研究科・理学部長  
 平成 9 年 東京大学副学長  
 平成10年 理化学研究所理事長  
 平成15年 独立行政法人理化学研究所顧問  
 平成16年 独立行政法人理化学研究所相談役  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学監事

## 河 野 善 彦 (こうの よしひこ) (非常勤)



昭和20年生  
 昭和43年 京都大学農学部卒業  
 昭和43年 海外経済協力基金採用  
 昭和56年 ソウル主席駐在員  
 昭和61年 パリ主席駐在員  
 昭和63年 O E C D / D A C 援助政策評価部長  
 平成 4 年 業務第 3 部次長  
 平成 5 年 開発援助研究所副所長  
 平成 7 年 バンコク主席駐在員  
 平成 9 年 海外経済協力基金業務第 1 部長  
 平成11年 国際協力銀行開発業務部長  
 平成12年 国際協力銀行専任審議役  
 平成13年 国際協力銀行理事  
 平成15年 国際協力銀行顧問  
 平成16年 笹川平和財団参与  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学監事 (非常勤)  
 平成16年 国立大学法人山口大学理事 (非常勤)  
 平成16年 国際協力機構 ( J I C A ) 国際協力客員専門員



## 経営協議会委員(学外委員)

### 内 永 ゆか子 (うちなが ゆかこ)



昭和21年生  
 昭和46年 東京大学理学部卒業  
 昭和46年 日本アイ・ビー・エム株式会社入社  
 平成 5年 日本アイ・ビー・エム株式会社アジア・パシフィック・テクニカル・オペレーションズ アジア・パシフィック製品開発統括本部長  
 平成 7年 日本アイ・ビー・エム株式会社取締役アジア・パシフィック・プロダクツ担当  
 平成11年 日本アイ・ビー・エム株式会社取締役ソフトウェア開発研究所長  
 平成12年 日本アイ・ビー・エム株式会社常務取締役ソフトウェア開発研究所長  
 平成15年 日本アイ・ビー・エム株式会社常務執行役員ソフトウェア開発研究所長  
 平成16年 日本アイ・ビー・エム株式会社取締役専務執行役員ソフトウェア開発研究所長  
 平成16年 日本アイ・ビー・エム株式会社取締役専務執行役員開発製造担当兼ソフトウェア開発研究所長  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)  
 平成11年 米国WITI(ウィメン・イン・テクノロジー・インターナショナル) 殿堂入り  
 平成14年 ハーバード・ビジネス・スクール・クラブ・オブ・ジャパン  
 ビジネス・ステーツウーマン・オブ・ザ・イヤ―受賞  
 平成12年 文部科学省中央教育審議会委員  
 平成15年 内閣府男女共同参画会議議員

### 古 賀 正 一 (こが まさいち)



昭和11年生  
 昭和34年 東京大学工学部卒業  
 昭和34年 株式会社東芝入社  
 昭和63年 株式会社東芝取締役 情報処理・制御システム事業本部副本部長  
 平成 4年 株式会社東芝常務取締役(情報処理・制御システム事業本部長)  
 平成 6年 株式会社東芝専務取締役(情報機器・映像・家電グループ分担役員)  
 平成 8年 株式会社東芝代表取締役副社長  
 平成13年 株式会社東芝常任顧問  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)  
 市川学園(市川中学校、高等学校)理事長  
 船橋学園(東葉高等学校)理事長

### 佐々木 正 峰 (ささき まさみね)



昭和16年生  
 昭和43年 文部省入省  
 昭和61年 文部省教育助成局教職員課長  
 平成元年 文部省学術国際局研究機関課長  
 平成 3年 文部省教育助成局財務課長  
 平成 4年 文部省大臣官房会計課長  
 平成 6年 文部省高等教育局私学部長  
 平成 8年 文部省体育局長  
 平成 9年 文部省高等教育局長  
 平成12年 文化庁長官  
 平成14年 独立行政法人国立科学博物館長  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)

## 経営協議会委員(学外委員)

### 白 井 克 彦 (しらい かつひこ) 工学博士



昭和14年生  
 昭和38年 早稲田大学第一理工学部卒業  
 昭和43年 早稲田大学大学院理工学研究科博士課程退学  
 昭和40年 早稲田大学第一理工学部助手  
 昭和43年 早稲田大学理工学部専任講師  
 昭和45年 早稲田大学理工学部助教授  
 昭和50年 早稲田大学理工学部教授  
 平成 6 年 早稲田大学教務部長兼国際交流センター所長  
 平成10年 早稲田大学常任理事  
 平成14年 早稲田大学総長(理事長・学長)  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)

日本放送協会放送技術審議会委員  
 文部科学省 学校法人運営調査委員  
 文部科学省 大学設置・学校法人審議会委員(大学設置分科会)  
 社団法人私立大学連盟常務理事  
 財団法人大学基準協会理事  
 財団法人日本国際教育協会理事

### 長 島 徳 明 (ながしま のりあき)



昭和14年生  
 昭和37年 東京農工大学繊維学部卒業  
 昭和37年 帝人株式会社入社  
 平成 7 年 帝人株式会社取締役  
 平成 9 年 帝人株式会社常務取締役  
 平成11年 帝人株式会社専務執行役員  
 平成13年 帝人株式会社代表取締役専務取締役  
 平成15年 帝人株式会社代表取締役副社長  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)

### 畠 中 篤 (はたけなか あつし)



昭和15年生  
 昭和40年 東京大学卒業  
 昭和40年 外務省入省  
 平成 6 年 外務省大臣官房領事移住部長  
 平成 7 年 外務省経済協力局長  
 平成 9 年 外務省特命全権大使 南アフリカ共和国駐劄兼ねてナミビア国ポツワナ国駐劄兼ねてレソト国駐劄兼ねてスワジランド国駐劄  
 平成13年 外務省特命全権大使 オーストラリア国駐劄  
 平成15年 独立行政法人国際協力機構副理事長  
 平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)

## 経営協議会委員(学外委員)

### 畑 中 孝 晴 (はたなか たかはる)



昭和9年生  
昭和31年 東京農工大学農学部卒業  
昭和31年 農林水産省入省  
昭和59年 農林水産省農蚕園芸局次長  
昭和61年 農林水産技術会議事務局長  
昭和63年 農林漁業金融公庫理事  
平成7年 社団法人農林水産先端技術産業振興センター理事長  
平成13年 財団法人日本花普及センター理事長(非常勤)  
平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)  
  
東京農工大学同窓会長

### 光 川 寛 (みつかわ ひろし)



昭和19年生  
昭和42年 通商産業省入省  
平成3年 工業技術院総務部研究業務課長  
平成4年 工業技術院総務部技術審議官  
平成5年 通商産業省大臣官房審議官(基礎産業局担当)  
平成6年 通商産業省大臣官房技術総括審議官  
平成8年 新エネルギー・産業技術総合開発機構理事  
平成13年 新エネルギー・産業技術総合開発機構副理事長  
平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)

### 三 輪 睿 太 郎 (みわ えいたろう)



昭和18年生  
昭和40年 農林省入省  
平成2年 農林水産技術会議事務局研究管理官  
平成3年 農林水産技術会議事務局研究開発課長  
平成4年 農林水産技術会議事務局主席研究管理官  
平成5年 農林水産技術会議事務局研究総務官  
平成9年 農林水産技術会議事務局長  
平成12年 農業研究センター所長  
平成13年 独立行政法人農業技術研究機構理事長  
平成15年 独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構理事長  
平成16年 国立大学法人東京農工大学経営協議会委員(学外委員)

## ◎ 平成16年度 東京農工大学入学式を挙

4月7日、府中の森芸術劇場どりーむホールにおいて、平成16年度東京農工大学入学式が行われ、国立大学法人として初めての新入学生1,704名（連合農学研究科を除く。）を迎えました。

式では学生表彰も行われ、工学教育部博士後期課程電子情報工学専攻1年の伊藤雅一君、馬術部及びヨット部に、学長が表彰状を授与しました。

伊藤君は、21世紀のエネルギー問題解決のオプションとして世界の砂漠地域などの未利用地に大規模の太陽光発電システムを導入することを研究目的とした研究活動を行っており、昨年5月に、第3回太陽光発電世界会議における招待講演の内容が優秀であったため「若手研究者奨励賞」を受賞し、今年1月には、第14回太陽光発電国際会議の招待講演を要請され、技術セッション（オーラル）において正座長となるなど、「学術研究活動において、特に顕著な業績を挙げ、学界又は社会的に高い評価を受けた場合」に該当し、表彰されました。

また、式終了後は学生生活オリエンテーション、学生による歓迎会、サークル紹介などが行われました。新入学生の内訳、被学生表彰者及び団体名は以下のとおりです。

（新入学生の内訳）

農学部	335名	工学教育部（博士前期）	315名
工学部	590名	工学教育部（博士後期）	72名
ツイニング・プログラム	1名	農学教育部（修士課程）	202名
3年次編入学生（農学部）	3名	生物システム応用科学教育部（博士前期）	85名
3年次編入学生（工学部）	76名	生物システム応用科学教育部（博士後期）	25名

（被学生表彰者及び団体名）

学生表彰	学術研究賞	伊藤雅一
	課外活動功績賞	馬術部
		ヨット部



## 平成16年度 東京農工大学入学式告辞

今年も木々が芽吹き生命が躍動する季節、新入生を迎え入れる時がやって参りました。本日は東京農工大学へ入学された新入生と、ご家族の皆さんに心からお祝い申し上げます。

本年度の新入生は、学部では、農学部が338名、工学部は667名で合計1,005名であります。大学院は、共生科学技術研究部、工学教育部、農学教育部、生物システム応用科学教育部、連合農学研究科より構成され、修士課程、博士課程併せて776名が入学しました。従って、学部、大学院を合わせた新入生の合計は1,781名となります。

この1,781名のうち、外国人留学生は、東北アジア、東南アジア、中近東、東ヨーロッパの国々から96名で、これから本学で皆さんと一緒に勉学、研究を始めようとしております。東京農工大学にはすでに在学中の留学生が324名おりますので、この国際性豊かな環境の中でお互いの交流を深め、国際的視野を広めて頂きたいと思っております。最近あらゆる分野でグローバル化が進展しております。異なる国々の文化の理解は、今後の国際交流に取って大変重要であります。

さて、私は、先ほど皆さんの東京農工大学への入学を「心からお祝い」しましたが、これには理由があります。皆さんは、受験雑誌や、オープンキャンパスなどの機会を通して、おぼろげながら、「東京農工大学」のイメージをお持ちと思いますが、どんなイメージか思い起こしてみてください。私が「心からお祝い」しました理由は、現在の東京農工大学が実際には、今皆さんがイメージしているよりもっと素晴らしい大学だからであります。本学は最近のいろいろな評価で高い得点を獲得し、現在では科学技術系大学として、日本の主要大学の一つとして認められております。例えば、本学工学部は平成16年2月に発表されたある新聞社の研究力に関する総合評価でその実力が全国第5位にランクされました。さらに、農学部の学生が多く受験する国家公務員試験で、将来、幹部職員となる第一種試験というのがありますが、この試験の学生数あたりの合格者の割合は第4位にあります。すなわち、大学の規模としてはあまり大きくはないのですが、教育、研究における質の高さがこれらの数字に示されております。そして、皆さんが入学されたこの平成16年は、東京農工大学にとっても新たな船出の年でもあります。それは、ひとつはこの4月1日より法人化され、大学の自主性・自立性が尊重されるシステムになったことでもあります。したがって、教育力、研究力、社会貢献力がより豊かなオンリーワン大学を目指すことができるようになります。もうひとつは、文部科学省より、本学が「大学院大学」になることを認められた年でもあるからです。新入生のみなさんはどうぞ、東京農工大学に自信と誇りを持って勉学と、研究に励んでいただきたいと思っております。

ところで皆さんはどのような大学生活を送りたいと考えているのでしょうか？学部に入學する新入生にとって、これからの4年間は専門的な知識を修得する事は当然の事として、さらに「自分発見の旅」の期間でもあります。すなわち、自分がこれからどのように生きどのような人生を送ろうとしているのかを思索する時間でもあります。この「どのように生きるのか」と



言う問いかけに対する答えは、皆さん一人一人が自問自答しながら探し求める課題でもあります。そして目標が定まったら後は、思いっきりその目標に集中し、在学中にこれだけは成し遂げたと自信を持って言えるようにしてください。また、現代は情報が氾濫し、皆さんは情報洪水の中でこれからの時間を過ごすことになります。適切な情報の取捨選択をして、情報洪水の中に埋没することなく目標にむかって邁進して下さい。

大学院に入学された皆さんは、学部生活の中で、自分の進路をある程度絞り込み、専門家として将来に備え勉学研究に励まれることと思います。研究には、うまく行く時と、うまく行かない時もありますが、どんな時も「知恵」によって道が開ける事を確信し研究を進めてください。「失敗は成功の母」でもあります。問題に遭遇したときは、徹底した討論が役に立ちます。そして、従来から大学が有している「知」の上に更に「知」を重ねて、独自性を発揮するようお願い致します。

学部への新入生、大学院への新入生それぞれの立場で、これからの時間が充実した大学生活となることを望んでやみません。

さて、東京農工大学は、東京の近郊にあって、広大なキャンパスに恵まれ、新緑の季節になると、小金井キャンパスも、府中キャンパスも鬱蒼とした緑に包まれるようになります。この2つのキャンパスの間は、自転車で移動できますので、時には、勉学、研究の合間を割いて両方のキャンパスを見学してください。いろいろな発見があるのではないかと思います。例えば小金井キャンパスにある繊維博物館に入ると、今でも昔の機械が動く状態で展示されており、昔の技術者の素晴らしい知恵の一端を、驚きを持って体験することができます。また、府中キャンパスには昭和の初期に建てられ、現在、東京都の文化財に指定されている時計台のある建物や、今から120年ほど前の明治時代の始めに、東京農工大学の先祖と言うべき「駒場農学校」を、私財を投じて設立した、大久保利通公の遺徳を称えた記念碑もあります。このような、東京農工大学建学の歴史とその遺産を通して、日本の近代史の一端に触れてみてください。現代を理解するきっかけの一つを感じ取れるのではないかと思います。

最後に、本学が新たに発展するこの記念すべき年に入学した新入生に対しましてもう一度歓迎すると共に、教職員一同、皆さんと一緒に新たな東京農工大学の歴史をつくっていきたく願っております。

平成16年4月7日

東京農工大学長 宮田清藏



## ◎ 平成 16 年度東京農工大学大学院 連合農学研究科入学式を挙行

4月16日(金)、農学部講堂において、平成16年度東京農工大学大学院連合農学研究科入学式が行われ、77名が入学しました。

式では、宮田学長から告辞があり、茨城大学宮田学長及び宇都宮大学田原学長からのあいさつ、並びに構成大学関係者の紹介がありました。



### 平成 16 年度

#### 東京農工大学大学院連合農学研究科入学式告辞

平成16年度東京農工大学連合農学研究科の入学式にあたり、何よりもまず当博士課程に入学される皆さんにおめでとうと申し上げます。そして本研究科は皆さんを心から歓迎するものであることを、関係者を代表して表明致します。

本日の入学式には、構成大学である茨城大学の宮田武雄学長、宇都宮大学の田原博人学長をはじめ國見研究科長、三大学の農学部長及び理事等関係者の方々多数のご臨席を仰ぎ、皆さんを祝福していただいております。

本日、新たに連合農学研究科に入学されます学生諸君は77名ですが、その内茨城大学に20名、宇都宮大学に14名、東京農工大学に43名がそれぞれ配置されます。本連合農学研究科の最大の特色は、三大学にまたがる複数の教官から研究指導を受けられることです。皆さんがこの特色ある制度をフルに活用して、所期の目的を達成することを願っております。

なお、77名の中には中華人民共和国、大韓民国、モンゴル国、タイ王国、ミャンマー連邦、エジプト・アラブ共和国、ヨルダンハシェミット王国、オマーン国から来日された16名の留学生がおります。留学生の皆さんには勉学・研究とともに日本の文化についても造詣を深めていただきたいと思っております。

現在の地球は、交通通信手段の発達により国と国の距離が急速に縮まってきております。このような状況の中で、異なる文化間の相互理解は地球の平和と持続的な発展に欠かすことができません。したがって、日本人の学生の皆さんも連合農学研究科が持つこの国際的環境を積極的に利用して、異なる文化の理解に努めてください。そして、国際的な交流の輪を広げていっ

て欲しいと思います。文化が違えば、ものの見方、考え方、価値観が違ってきますが、これを認識し、お互いを認め合うことは相互理解の大切な第一歩です。

さて、皆さんが人生の大部分を過ごす21世紀は私が人生の大部分を過ごした20世紀とはかなり様相の異なる社会になるのではないかと感じております。現在、地球の人口は63億人で、地球上に生存した生物としては過去に例を見ない繁栄をしております。しかし、この繁栄の影ではいろいろな問題が発生していることは、皆さんも新聞等でご存知ではないかと思っております。20世紀の農学は食糧増産、品種改良や生物が作る有機物質の分離などに力が注がれてきました。21世紀の農学はこれらの課題に加えて人類の繁栄においてもたらされた影の部分、つまり「地球の生存環境の維持と持続的かつ安全な食料の生産」という大きな課題を背負うようになったのであります。この課題は農学の個別の分野が単独では対応できず、問題解決のためには異なる分野の協力が重要になります。皆さんはこれから学位論文の研究テーマとしてきわめて狭い分野を深く掘り下げるといった作業が続くことと思いますが、是非「地球の生存環境の維持」という視点を忘れることなく、広い視野を持っていただきたいと思います。

ここで、ヒトの脳の働きについて考えて見ましょう。私は最近、人の脳は神経細胞で構成される数多くのコンピューターの集合体ではないかと感じております。このコンピューターは、人が研究活動をしたり生活活動をするとき、あるものは「ON」になりあるものは「OFF」になったりしているのです。しかし、ヒトの脳のコンピューターが機械のコンピューターと違う点の一つあります。それは人間が意識していないときにもどうやら活動しているのです。つまり、何か問題があってそれが気がかりになっていると、自分が意識していない時でも脳のコンピューターは活動しており分析を進めているのです。ですからある時、突然思いがけないことに気付いたり、新しいアイデアが浮かんでくるのではないのでしょうか。例えば、試験管の中でDNAを合成する原理を発見したカーリー・マリスはその原理を自動車の運転中に思いついたと述べております。皆さんも、皆さんの大いなる可能性を信じ、自己の潜在能力を最大限に引き出すべく、「問題意識」を持って研究に挑み、与えられた研究課題を自分なりに発展させてみてください。そうすれば、自分が本当に感動できる発見に遭遇できるのではないのでしょうか。サイエンスにおいて「感動」できることは大切なことではないかと思っております。

さて、これから青葉の季節を向かえ、緑のキャンパスで皆さんの本格的な研究生生活が始まりますが、時には研究の合間を見つけてリフレッシュの時間も作ってください。上手なりフレッシュ、つまり気分転換は研究の効果を高める上でも大切であります。そして、リフレッシュには電車などで足を伸ばすなどして「距離」を入れると効果があります。

それでは、三年後に立派な研究成果を挙げられてここで皆さんが再会することを期待し告辞いたします。

平成16年4月16日

東京農工大学長 宮田清藏

## ◎ 連合農学研究科構成法人間協定書署名式を挙

4月16日(金)、連合農学研究科入学式挙後、本部第1会議室において、連合農学研究科構成法人間協定書署名式が、三大学長(茨城大学、宇都宮大学、東京農工大学)間で執り行われました。

この協定書は、国立学校設置法が廃止されたことに伴い、新たに連合農学研究科の枠組みを担保し、国立大学法人化後の各構成大学間の業務運営を円滑にするため、本学を中心に、文科科学省、全国6連合農学研究科及び構成大学との調整を経て作成したものです。



(左から、宇都宮大学・田原学長、宮田学長、茨城大学・宮田学長)

## ◎ 平成 16 年度 留学生センター 第 20 期日本語研修コース開講式を挙

4月13日(火)、本部第2会議室において平成16年度留学生センター第20期日本語研修コース(11ヶ国18名、1地域1名)の開講式が行われました。

日本語研修コースは、6ヶ月間、日本語・日本事情の教育を行うものです。式では、神田副学長、澁澤留学生センター長から英語であいさつがありました。続いて、研修生の紹介、瀬田副学長ほか関係教職員の紹介がありました。



## ◎ 川出 洋助手が「農芸化学奨励賞」を受賞

3月28日(土)、広島国際会議場で開催された日本農芸化学会2004年度大会の総会において、生命農学部門生物制御科学専攻川出洋助手が本年度の「農芸化学奨励賞」を受賞しました。

本賞は、農芸化学の進歩に寄与する優れた研究をなし、将来の発展を期待される満40歳以下の会員に授与されるもので、「糸状菌と植物におけるジベレリン生合成酵素の構造と機能に関する研究」が評価されての受賞となりました。



(川出 洋助手)

## ◎ ハバロフスク大学副学長が本学を表敬訪問

4月15日(木)、本学の姉妹校であるロシア国立ハバロフスク工科大学のアレキサンダー・グベンコ副学長(国際関係担当)とセルゲイ・シャロバノフ副学長(総務担当)の2名が宮田学長を表敬訪問され、今後の協力関係の進展について意見交換が行われました。なお、表敬訪問に先立って、北嶋副学長が、同大学の学生を受け入れている工学部情報コミュニケーション工学科および両副学長が関心をもっている産官学連携・知的財産センターを案内しました。



(左から4番目がグベンコ副学長、5番目がシャロバノフ副学長)



# 行 事

〈平成 16 年 4 月〉

日	曜	本部・図書館関係事項		学部関係事項	
1	木	理事・部局長等任命	9:00	学長室	
		第1回役員会	9:15	学長室	
		第1回教育研究評議会	9:30	学長室	
		法人発足にあたっての学長挨拶	10:00	本・第2会議室	
		第2回教育研究評議会	10:15	本・第1会議室	
		人事異動辞令交付	13:30	学長室	
6	火			生物システム応用科学教育部 運営委員会	9:30 生・教育部長室
				農学部運営委員会	15:00 農・第2会議室
7	水	入学式	10:00	府中の森芸術劇場	生物システム応用科学教育部
		第1回経営協議会	任命後	本・第1会議室	新入生オリエンテーション
		役員会	13:30	学長室	14:00 生・1番, 2番講義室
		経営協議会委員学内見学	13:30	府中地区・小金井地区	
		役員及び教育研究評議員との懇談会	15:30	本・第2会議室	
		法人化記念パーティー	17:00	50周年ホール	
8	木	教育改革検討委員会	15:00	学・C会議室	
9	金	学生定期健康診断(学部新入生、連合農学研究科、連合獣医学研究科)	8:45	農・体育館	
		第10回大学教育センター設置準備委員会	15:00	学・C会議室	
12	月	学生定期健康診断(農学部2~6年、農学教育部、農学部研究生等)	8:45	農・体育館	
		事務連絡会議	15:00	本・第2会議室	
13	火	留学生センター日本語研修コース開講式	11:00	本・第2会議室	
14	水	学生定期健康診断(工学部3, 4年、工学部研究生等)	8:45	工・体育館	FSセンター会議
					10:00 FSセンター管理棟会議室
				工学部運営委員会	10:00 工・中会議室
				農学教育部教授会	14:30 連・第2会議室
				農学研究科委員会	教授会終了後 連・第2会議室
				生物システム応用科学教育部 教授会	15:30 生・大会議室
15	木	学生定期健康診断(工学部2年、工学教育部、生物システム応用科学教育部)	8:45	工・体育館	
		表敬訪問(ハバロフスク工科大副学長)	16:00	学長室	
16	金	連合農学研究科入学式	11:30	農・講堂	連合農学研究科代議員会
		連合農学研究科三大学長会議	13:30		10:30 連・第1会議室
		連合獣医学農学研究科委員会入学式(岐阜大学)			
19	月	役員会		学長室	
21	水	第3回教育研究評議会		本・第1会議室	農学部広報・社会貢献委員会
					14:30 農・第2会議室
23	金	日仏共同博士課程日本コンソーシアム総会	16:00	日仏会館	
26	月	役員会		学長室	
		留学生センター運営委員会	15:00	学・C会議室	
28	水			農学部教務委員会	14:45 農・第1会議室

★ 府中図書館 定例休館日 4月30日(金) 臨時休館日 4月 1日(木)～ 4月 3日(土) 〔 短縮開館4月5日(月)～4月7日(水)8:45～17:00  
 小金井図書館 定例休館日 4月30日(金) 臨時休館日 4月 1日(木)～ 4月 3日(土) 〔 通常開館4月8日(木)～ 8:45～19:45

## F M多摩丘陵（波丘地）の植物 その13

## タツナミソウとオカタツナミソウ

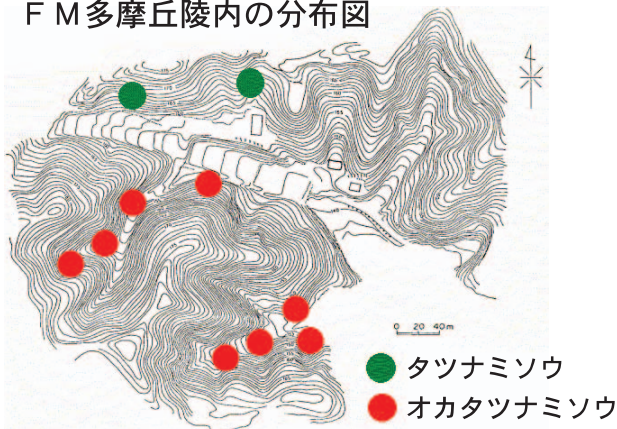


シソ科タツナミソウ属で、F M多摩丘陵内で見られるものは、タツナミソウとオカタツナミソウです。シソ科の花は唇形花と呼ばれる形をしていますが、同じ唇形花でも色々あります。このタツナミソウ属の唇形花は独特です。潜望鏡のように伸びた花は、同じシソ科のホトケノザにも少し似ていますが、ホトケノザと違って花が皆一方向を向いて咲きます。その様が、あたかも打ち寄せる波の波頭の様なので、立浪草という名前がつけられました。

オカタツナミソウの場合は、花穂が縦長とならず、下の写真の様に咲きます。上唇が兜のような形になっているのは、両方に共通した特徴です。下唇の様子は、よく観察しますと、両者に大きな違いがあることに気づきます。

花期はほとんど同じで5、6月ですが、生息している場所は大分違います。

F M多摩丘陵内の分布図



上のF M多摩丘陵内での分布図を見て頂ければお分かりになるとと思いますが、タツナミソウが日当たりのよい丘の上に生息しているのに対し、オカタツナミソウは日当たりのあまりよくない沢付近に多く見られます。何だか名前が逆のようですね。

どちらも個性的な愛嬌のある花で、一目見て気に入ってしまいました。



オカタツナミソウの蕾





## 農工大の樹 その49



---

### 〈 解 説 〉

---

## キリ

(ノウゼンカズラ科、キリ属の種、学名 *Paulownia tomentosa* Steud.)

キリは高さ15m、直径50cmにもなる落葉高木で、皮目の多い樹皮は灰白色です。大型の葉は対生し、写真のように4月中旬には長さ5－6cmの淡紫色の花を円錐状に付けます。自生地は中国揚子江流域、韓国鬱陵島、九州の大分・宮崎県境の山岳との説がありますが、本当の原産地は不明です。本州の中部以南ではテングス病にかかりやすいので、主な栽培地は東北地方、関東北部、新潟などですが、野生化したものは各所に見ることができます。材は日本産の材の中で最も軽く（比重0.27-0.30）、湿気を吸いにくく、通さない性質があり、狂いが少ないので、家具、器具、建具、箆筒などに古くから使われました。また、魚釣りの浮子、軟らかく均質な性質を利用して桐炭とし、研磨用、火薬用、眉墨としても利用されました。キリの紋章は菊と共に皇室の紋章であり、高貴なものとしてきました。これは古代中国で聖王の象徴であった鳳凰が「梧桐の木に宿り竹の実を食う」と言われたことに由来しているのだそうです。この家紋には花の数で五七の桐（中央に7つの花、両側に5つの花）、五三の桐などの種類があります。

(環境資源共生科学部門教授 福嶋 司)